

再生

第一章 プラナリア



2 動物舎

薬理学教室の棟の近くに、動物舎がある。動物舎にはバイトのKがいる。背が低く、度の強い眼鏡をかけていて、ぽっちゃりとした風貌で、少し足を引きずって歩く。昔、丸出だめ夫というマンガがあったらしい。あれとそっくりだと薬理学の教授が言って

いた。教授が大昔の少年マガジンを持ってきて、な、な、そっくりだろうと得意げだった。なるほどそっくりだ。Kはスキヤナ―で取り込み、コンピューターの壁紙に使っている。スイッチON。丸出だめ夫が飛び出す。理由はともかく、自分が目立つのが嬉しいのだ。それだけではない、プリンターで打ち出し、動物舎の一番目立つ場所に貼っている。

Kには雌ザルの花子を強姦したという噂もある。

ドアをノックしても返事がなかった。ドアを開けると、強烈な動物臭が鼻を突く。通路のような部屋の奥で、テレビがついていた。画面は時代劇。折りたたみのパイプ椅子に腰掛けたKがぼんやりとした目で僕を振り返った。

「やあ」

「やあ」

「何をしているの？」

「ビデオを見ているんだ」

「時代劇か？」

「ああ、座頭市だよ」

シュ、シュと居合いのまねをする。褒めたら、多分歌い出す。

「およしなさいよ」

ほめなくても歌い出した。一節歌ったり、科白を言ったりした後、照れたように笑った。

「雨、降ってる？」

「降ってる」

「そう」

「時代劇が好きなの？」

「そういうんじゃないけど」

暫くの沈黙。雨の音が聞こえる。マウスがたてる小さな音も聞こえる。そこで、僕は気づく。座頭市が斬る。敵役が座頭市をのしる。テレビからは音が聞こえてこない。別に音を消して、時代劇を観ては行けないということはないけど、二人の間の沈

黙が、テレビの沈黙に飲み込まれていくような気がする。

「時代劇って、観ていると、何かものすごく不思議な気がするんです」

「えっ」

「……」

「ごめん、よく聞いていなかった」

「時代劇って、観ていると、何かものすごく不思議な気がするんです」

「どうして？」

「ここにいる人って、もういないんですよ」

「勝新太郎は多分もういないなあ」

「そういう意味じゃなくて、役者さんが演じている人のことですよ」

「江戸時代だから、いないと思う」

「みんな死んでしまっているのに、ちよんまげ結った人が、動いているのがすごく不思議な気がするんですよ」

「よく分からないけど」

「江戸時代の人は、それが自分たちのリアルな時間であって、未来で、僕らが彼らの生活をこんな風に観ているなんて思いもしなかった」

「それはそうだろうけど」

「僕らだってそうですよ。僕らよりずっと先の人は僕らをきつとこのように見るのだと思う」

「そうかもしれない」

「それがどうしたんだって思っているんですよ」

「思ってる」

「正直ですね。日向さんは」

「それだけが取り柄なんだ。雨、止まないね」

「ええ」

「日曜日が運動会なんだ」

「美人の奥さんと一緒か。いいなあ」

「君も、花子によく似た奥さんをもらえばいい」

「殺すぞ」

反射的にKが言った。

奥で何が、ガタンと動いた。一瞬雨の音も消えた。

「嘘」

雨の音がまた帰ってくる。

「嘘ですよ。コーヒーを飲みます？」

「ああ」

Kは立ち上がり、インスタントコーヒーをいれ始めた。

「インスタントコーヒーでもね、最初、少量の熱湯で溶かして、こうしてスプーンで練ってから、薄めたら結構いけるんですよ」

ここでコーヒーを飲むためには必ずこのセリフを聞かなければならない。カチカチと、スプーンで混ぜる音と一緒に。

「さっきの話し続けていいですか」とKは言った。僕は、少し考えて、頷いた。

「僕はあの時代にもいたかもしれないと思

うんですよ」

「江戸時代に」

「ええ、ただ忘れてるだけで」

「転生……」

「そんなたいそうなものじゃなくて、元々、そんなもんじゃないかと。なんだか、あそこ にいたような気がするんですよ」

Kは真っ直ぐに人差し指でテレビ画面を差して、そう言った。そして、続けた。

「それは、今という時間についても言えるんじゃないかなあ。ここにいる僕は、すなわち、僕自体が嘘だとしたら、本当の僕は他の所において、ここにいる僕は、所謂、夢みたいなものだとしたら。元々、多分、嘘も本当もないんだと思うけど」

「それじゃ俺は」

「多分僕の夢でしょう」

僕は、それに答えずに黙ってコーヒーを飲んだ。

「こんなに雨の音がするに、どうして、雨

が降っているかって聞いたの？」

「日向さんの耳に聞こえているか、確認したかったんですよ」

花子が小さく啼いた。

「ここでは、いつも雨が降っているんですよ。毎日」

急に動物臭がきつくなかった気がした。

「用事を忘れるところだった」僕は小さく笑った。Kも愛想笑いを浮かべた。僕は教務に内線電話をかけた。

「すぐに行きます」

と、男の声が返ってきた。そして、動物舎を出た。